

# 時切稲荷神社略縁起

時切稲荷神社は京都市伏見稲荷大社から分霊し、祈社山誕生寺の守護職、原田三河守の館の隣地、久米南町里方小字城に勧請されたが、大正末期（1923頃）、現在地に遷座された。分霊の記録は伏見稲荷大社の「稲荷山文書」にあったと思われるが、応仁の乱（文明9年1967ー1977）に焼失し、その後昭和初年、羽黒文書（山形県羽黒山）に、全国約4700の稲荷神社神籍の内に登記されている。

祭神は、宇賀魂命（うけのみたまのみこと）。神使（しんし）は狐。

稲荷の神は、平安時代、京都の教王護国寺（東寺）の鎮守として、その勢力を背景に全国に広く崇拜されるようになったが、山城の国を中心として、近畿一带に繁栄した秦氏（はだし）の氏神であったため、漆間家（法然上人の母秦氏）との縁により、加茂神社と共に、誕生寺の守護神として、16ー17世紀頃勧請されたと推定される。

祭神宇賀魂命は、本来田の神として五穀を司る神であったが、中世から近世にかけて、商業経済の発展に伴い、農耕神から商売繁盛の神としても信仰を集めるようになった。

太平洋戦争の終決まで、時切稲荷神社の社格は「村社」であったが、年2回の祭典には福岡南村長が出席し、祭祀料を奉獻していた。

現在の時切稲荷神社の社殿は、大正末期、古墳の址に建立され、棟梁は、久米南町里方の故西本実太郎氏と聞いている。

大祭は初午（陰暦2月の最初の午の日）と、夏の土用の入り（立秋の18日前）の名越祭。および月々の月例祭があった。供物は、赤飯、油揚げ、清酒を主とした。

筆者が子供の頃（昭和一ケタ代）、大祭の余興として、稲荷の境内で開かれる浪曲大会や、マジック大会は、地方の一大会であり、楽しみのひとつであった。

この稲荷に、尋ね人や、失せ物の発見を祈願するとき、「何月何日何時までに」と、時を切つて祈願すれば、必ずその時までに願いが叶うと言う噂が巷間に広まり、いつのほどにか「時切稲荷」（とききりいなり）と呼ばれるようになり、それが訛つて「トツキリサマ」として名高くなったようである。

昭和7年頃、江戸時代に奉納されていた〈無理な願いを時まで切つて叶えなされるありがたさ〉と書いた絵馬が発見され、新聞紙上に掲載されて一層有名となった。

登記された全国約4700社の稲荷神社の内、この「時切」の呼び名を持つ稲荷神社は他になく、霊顯あらたかな神社として現在も特異性を持っている。

昭和初期から太平洋戦争までのピーク時には、近郷近在はもとより、遠く京阪神などからの参詣があり、中国鉄道誕生寺駅から社殿まで、参詣の人波が続き、門前の河本亀豆腐店では、毎日500枚以上の油揚げを作ったが、その殆どが時切稲荷のお供えとして社前に積み上げられ、夜になると狐や野犬などが出没し、その片付けに、宮司が困惑したという話は、今も語り草となっている。

当時、稲荷山の参道も境内も、「大願成就」の、鳥居と幟で真っ赤に染めあげられ、奉獻された絵馬が社殿の回りに溢れていた。（当時の写真は、津山市江見写真館に保存されている）

稲荷神社の鳥居は、根元に黒の根包みを施し、島木の端が垂直であるのが特徴であった。

宮司は、江戸時代以降、代々塩島氏（美咲町西幸出身）に継承され、現在は、青北氏を經て中力功氏（久米南町宮地出身）に継がれている。

平成29年9月

中島義雄識